

木質パネルボードを外装材に使った建物

和田 孝 一

最近木質系の内装材（パネルボード）を一部に取り入れた建物をしばしば見かけるようになりましたが、外壁材として用いた建物はまだそう多くはありません。

ここに紹介するのは数少ない例の一部ですが、工場で材料をしっかり乾燥処理したのちに加工された、パネルボードと呼ばれる下見板を使用した例で、生材の板を乾燥が不十分なまま釘打ちして、狂ったり干割れしたりするかつての下見板とは性質が異なるものです。

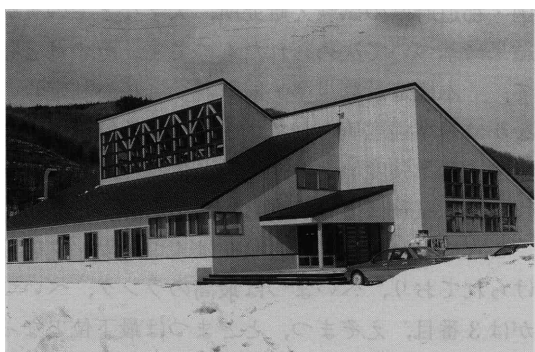


写真1 オケクラフトセンター（置戸町）

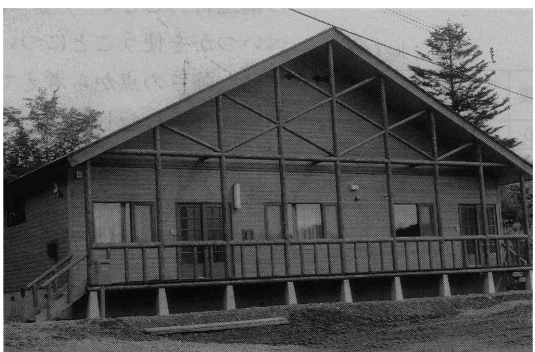


写真2 四番川会館（当別町）

写真1, 2は、トドマツを外壁に用いた建物です。

前者はドイツ下見（箱目地下見）というタイプのパネルを縦ばりしたもので、後者はよろい下見（ささら下見）というタイプのパネルを横ばりしたもので、後者は当場で試作した製品を用いています。

また写真3で見ると前面中ほどに“ハーフティンバー”という飾り板を入れ、幅方向の伸縮に対する緩衝帯を兼ねるとともにデザイン上のアクセントにする工夫をしています。

このほかに一般住宅では、すべての例ではありませんが写真4, 5のような輸入材による木質パネルボードを用いた住宅を札幌市豊平区のマイホームセンター内で実際に見ることができます。

当場の木質パネルボードは内装用壁材から発展してきましたので十分に木材を乾燥させたのち加工製造した製品です。また、さね加工を行っていますので、釘が隠れます。その時使用する釘は、さびによる汚染防止のためステンレス釘を用いるよ



写真3 四番川会館（当別町）



写真4 スウェーデンハウス(札幌市)



写真5 よねくらホームモデルハウス(札幌市)

う指導もしています。

またエンボス加工という、人工的に年輪を浮き上らせた加工も行えますので、施工直後から年月を経たような落ち着いた趣を与えることもでき、四番川会館ではこの加工を行った材料を使っています。

外壁用の塗装としては様々な種類がありますが四番川会館では、塗膜を形成しない木材表面保護着色剤を用い、木質の材質感を残すような塗装を行っております。

現在のところ木質パネルボードは一般住宅地では、防火規制の面から制約があり隣地境界線、道路中心線または同一敷地内の二以上の建築物相互の外壁の中心線から1階部分で3m以上、2階では5m以上の距離がとれるところであれば、

外壁材として使用可能です。

また、さらに防火性能を向上させるため、難燃処理を行った製品もあります。

パネルボードの標準的な施工方法は、胴縁一本(18mm)程度の厚さの通気層を設け、雄ざね側にほぼ45°程度の角度で斜めに釘打ちするのが一般的です。このほかに主に内装用が対象ですが、施工の簡素化のため特殊な金具を用いて施工する方法が外国ではあります。また、十分に乾燥した材料を、切削加工したパネルボードの場合、この含水率状態で壁組み施工すると降雨などによる含水率の上昇により、ふくれ現象を生じるのが通例なのですが、このパネルボードの動きを抑えるため、コンパネなどの合板に耐水性接着剤でべた貼りするなどの施工例も外装用として、一部でみられます。この場合にもコンパネの裏面に通気層を設けています。

いずれにせよ、必ず通気層を取って施工することが重要な点で、内・外装を問わず、温湿度的に厳しい環境で使用する時にこれは木をいかして使うという発想につながるものです。通気層を設けるのは極端な高湿度または過乾燥の雰囲気、パネルボードの表側または裏側にかたよって生じるのを避け、表裏ともできるだけ湿度的に穏やかな環境で、パネルボードを使用しようとするためです。

これまで述べてきたように木質パネルボードを用いた建物は、防火規制上の制約もあってまだまだ数も少ないのですが、従来の木造住宅の下見板とは異なった材料として生まれてきたパネルボードを、外壁に用いた建物は、本物嗜好の流れの中で多様化する個性の表現の一つといえるのではないのでしょうか。これを機会にもう一度木の持つあたたかみに触れてみてはいかがでしょうか。

(林産試験場 加工科)